更級日記「暁を」の歌私解

吉野政治

かへる年、睦月の司召に、親のよろこびすべきことありしに、かひなきつとめて、同じ心に思ふべき人のもとより、「さりともと思ひつつ、明くるを待ちつる心もとなさ」といひて、

明くる待つ鐘の音にも夢さめて秋のもも夜の心地せしかな

といひたる返りごとに、

暁をなにに待ちけむ思ふことなるとも聞かぬ鐘の音ゆゑ

右の文章は『更級日記』の万寿元年あるいは二年春の司召の段である。最後にある孝標女の返歌を中心に、この段全体の解釈についての私見を述べたい。

1

返歌の「暁を待つ」行為の主体について、三つの解釈がある。

第一は、作者自身とするものであり、宮田和一郎氏の『更級日記評釈』・新潮古典集成本（秋山虔氏校注）・新古典文学大系本（吉岡曠氏校注）などがこの解釈をとる。たとえば、新古典文学大系本では次のように訳されている。

暁を何でこんなにも待ったのでしょう。願いが成就するとも聞こえない鐘の音だというのに。

第二は、相手と自分との二人とするものであり、古典文学全集本（犬養廉氏校注訳）・講談社学術文庫本（関根慶子氏訳注）・旺文社文庫本（池田利夫氏訳注）・玉井幸助氏『更級日記評解（改訂版）』などがこの解釈をとる。たとえば、古典文学全集本では次のように訳されている。

お互いにこの夜明けをどうしてこんなにも待っていたのでしょう。思うことがなるとも聞こえない鐘の音だというのに。

第三は、相手とするものであり、宮田和一郎氏の『更級日記精講研究と評釈』（したがって、宮田氏は第一説からこの説に変わったことになる）・笠間選書本（鈴木知太郎・小久保崇明氏著）などがこの解釈をとる。たとえば、笠間選書本では次のように訳されている。

暁を何だって（そんなに）お待ちになったのでしょう。予期していたことが成就するとも聞かない鐘の音でありますのに。

本稿では、次節以降に述べるように「暁をなにに待ちけむ」は相手への難詰のことばと考えるので、第三の解釈をとる。また、前二説のような内容の歌だとすると次のような違和感がある、というようなこともある。すなわち、前二説に従うと、父の任官を信じて疑わなかったらしい作者が、それが成就しなかったと分かると一転して冷めた心理を抱き、「自嘲にも似たあきらめの響き」（全集）のある歌を歌ったということになる。また、作者家族のことを気遣ってくれる者への配慮ならば別の内容でもこと足りると思われるのに、結果的には自分の父親の能力について見切りをつけることになるような内容の歌を歌い、しかもそれを他人に贈ったということになる。いずれも、日記全体から感じ取られる作者の性格や、作者の父に対する（また父の作者に対する）思いを考えあわすと、すぐには信じがたい行為のように思われる。

2

返歌の「暁を待つ」行為の主体を相手と自分との二人とする第二の解釈は、「同じ心に思ふべき人」という語句に対する解釈の仕方と関連するようである。学術文庫本に次のようにある。

「暁をなにに待ちけむ」を、相手の「明くるを待ちつる心もとなさ」や「あくる待つ」の歌により、「あなたはなんで暁をそんなにお待ちになったのでしょう」と解することもできようが、せっかく同じ心に心配してくれる人に対してしっくりせず、自分も同じような気持ちで待ったことはいうまでもないから、口訳のように「お互いに……」とした。

右の引用文に「せっかく同じ心に心配してくれる人に対してしっくりせず」とあるのは、本文の「同じ心に思ふべき人のもとより」によるのであろうが（玉井幸助氏『更級日記評解（改訂版）』も同じ）、この「同じ心に思ふべき人」は「同じ心に心配してくれる人」ではないであろう。

「べし」は当然・予想・適当・可能・義務・決意・命令などの意味に分類されるが、その基本義は「周囲の事情、前後の状況あるいは従来の経験などから考えて、どうしてもこのようにあるだろうと推定する意、当然の気持ちが強い」（小学館『古語大辞典』）もので

ある。中西宇一氏[1]は、この当然・必然推定の「べし」を、その推定把握の仕方の違いによって、ソウダの意の様相的推定とハズダの意の論理的推定の二系列に大別されたが、前者は対象自体に存する必然の結果として把握される「現実的・様相的な推定」であり、後者は物事のことわりによる必然の帰結として把握される「観念的・論理的な推定」である。「同じ心に思ふべき人」の「べし」を、この説にそって限定すれば、後者「ハズダの意の論理的推定」であり、「（私達と）同じ気持ちで期待してくれているはずの人」（旺文社文庫）の意味であろう。「私達と同じ心に思ってくれそうな人」でも「作者一家と悲喜を同じくするような親しい人」（集成）でも、あるいは「私どもと同じ心に浮き沈む親しい人」（全集）の意味でもないはずである（ちなみに「親のよろこびすべきこと」の「べし」もまた、「孝標はしかるべき筋への働きかけ」（集成）をしていたものと思われるから、論理的推定であり、「きっと任官するはずだ」という確度の高い推量判断を示しているものと考えられる）。

ことさらに「べし」の意味を確認したのは、「同じ心に思ふ人」ではなく、「同じ心に思ふべき人」と表現された時、当然そうあるべき人が、実際にはそうではないといった意味あいが含まれることがあるからである。この場合もまたそうであることは、贈問の詞と歌の内容から窺われるように思う。

3

相手のことばの最初に見える「さりとも」という語は、「現状を不本意ながら認めた上で、なお一すじの望みを将来に託する場合に使う」（『岩波古語辞典』）と説明されるのが妥当と思われるものである。『新明解古語辞典（補注版）』は、「さりともと思ふ」の形を特立して、「悲観すべき状況の中でひとすじの希望をいだく場合に用いる語。それにしてもなんとかなるだろう。全然絶望すべきでもないだろう」と説明し、この例を一例として示す。

ところが、『更級日記』の注釈書でこのような理解をしたものは、西下経一氏の校注されたもの（岩波文庫本一九三〇年・古典文学大系本一九五七年）を例外として、管見では見当たらない。全集本には「『さりともと…』は、事の成就に大方の比重をかけながら、しかも一抹の不安を懸念する気持」とあり、続けて「もっとも、この『さ』の具体的内容が必ずしも判然とせず、(1)『たいてい大丈夫』ととるか、(2)『見込み薄の現状』ととるかによって意味も変わってくるが、前文『親のよろこびすべきことありし…』とあるのは、かなり確度の高い期待のようなので、(1)と見るべきであろう。」とあって、「いくらなんでも今度こそは」と訳す。この訳によると、「さりとも」の持つ意味あいは、先引の辞書の説明とは異なるものにな

るが、この全集本のような理解は、玉井幸助氏校註『更級日記新註』（一九二五年）の「大方はうまくゆくだろうと思ひながら、なほ少し不安のある心もち」という「さりとも」の語注、曽沢太吉氏の『更級日記新解』（一九五四年）の「今度はいくらなんでも」という訳からすでに見られ、以降、管見では宮田和一郎氏の『更級日記精講』（一九五八年）・全集本（一九七一年）・学術文庫本（一九七七年）・旺文社文庫本（一九七八年）・笠間選書本（一九七八年）・集成本（一九八〇年）・今井卓爾氏『更級日記譯注と評論』（一九八六年）・新古典大系本（一九九一年）と受け継がれてきているものである。

しかし、全集本（他の注釈書も同様と推測される）が、そのような理解の根拠とした「親のよろこびすべきことありし…」というのは孝標女側の判断であり、「さりとも」の語を用いた相手の判断ではない。たとえ孝標女側が「同じ心に思ふべき人」と思っていたとしても、その人が実際に期待どおりに思ってくれていたかどうかは分からない。とすれば、全集本に言うように、仮に「さりとも」に(1)・(2)の二つの場合があったとしても、「さりともと思ひつつ」は他の類例に従って、(2)の「見込み薄の現状」と考えておく方がよいのではないかと思われる。

唯一の例外である西下氏の注釈には、「さりともと」に「だめと思いながら、それでも」（文庫本）・「だめと思いながら、一縷の希望をつなぐ語」（大系本）と注し、一首を次のように訳している（大系本）。

だめだと思いながら、それでもと思いながら、吉報をあてにして、夜のあけるのを待った時のたよりなさよ。

より直訳に近い形で訳すれば、「それでも（あるいは、任官なさるかもしれない）と思いながら」という程度の意味になる言葉づかいの裏にある心を明瞭に言い表わせば、この大系本の訳のようなことになると思う。とすれば、自分達と同じ心に、今度こそ任官間違いなしと信じていてくれるはずの人が、実はそうではなかったことを、孝標女はこの「さりとも」の一語によって思い知らされたことになる。

4

贈問歌の内容は、「さりとも」の語から窺い得た相手の本心を裏づけるものだったようである。この「明くる待つ」の歌の「夢さめて」は、多く「吉報の夢も破れて」の意と取られているようであるが、旺文社文庫本では「平安時代では、理想や希望、願望を意味する『ゆめ』の用例がないようなので」として、一首を次のように訳している。

任官決定の夜が明けるのを待つ暁の鐘の声にも、はっと夢からさめて、この一夜は秋の百夜をすごした気持のしたことですよ。

平安時代の「ゆめ」の意味用法について、旧文社文庫本が指摘することの確認調査はいまだ不充分であるが、この時代の「ゆめ」は、はかないもの・心の迷いというような方向へ意味の拡がりは認められても、理想・希望・願望の意で使われたものは見当たらないようである。あるいは、それはdreamの訳として後世成立したものではなかろうか。『日本国語大辞典』では、その意味の用例に近代のものを挙げている。『更級日記』の他の「ゆめ」の用例もその意味ではない。したがって、「夢さめて」を単に「めざめて」とせず（この訳でも良いと思われるが）、「夢」を生かすとすれば、右に示した旧文社文庫本のような意とするのが、現在までの調査では、もっとも穏当であると考える。少しことばを補えば、おそらく「御尊父の任官がめでたく成就する夢を見ておりましたが、その夢からさめて」とでも言うのであろう。

さて、このような意味の歌であるとすると、「同じ心に思ふべき人」は、暁方の除目の発表を一応は気にしつつも、時折まどろんでいたことになり、『枕草子』二二五段の「除目に司得ぬ人の家」に描かれているように、一睡もせずに吉報を待ち詫びていたであろう孝標一家とは違っていたことになるわけである。

少なくとも今回の除目に関しては、この程度の関心しかなかった人であるとすれば、贈問歌は「すでに不首尾を知って同情を寄せたもの」（集成）ではなく、儀礼的に結果を尋ねてきたものと思われる。また、眠りが浅いのも「期待のため」（旧文社文庫）ではないであろう。

先に「同じ心に思ふべき人」の「べし」を論理的推定としたが、そこでは何を根拠として「同じ心に思ふ」ことが当然と把握されているのかと問うことをしなかった。それを問うことは「同じ心に思ふべき人」が作者一家にとって、どういう関係の人物なのかを問うことと同じになろうが、それはまた、この一段を解釈する助けとなるのではないかと思われる。筆者はこの人物は、具体的には親族の者ではないかと想像している。凡庸・魯鈍という孝標の評価については池田利夫氏の反論があるが（「菅原孝標像の再検討」国語と国文学一九七八・七）、同じ菅原道真の流れであり、文章博士や大学頭となっていた輔正・宣義・為紀らは、『御堂関白記』にも比較的頻繁に顔を出し、道長家の栄華の余沢にあずかっていたらしい（集成）のに対し、孝標は菅家の嫡流に生まれながら、文章博士にも大学頭にもなれず、国司としてもすでに四年の間失業中であり、しかも、約一年前の治安三年の十月には道真・都良香の真跡をとどめる龍門寺方丈の扉に仮名の拙草を添書して、道長一行の嘲笑を浴びてさえい

る（扶桑略記）のは事実である。このような状況の中で、親族の者が孝標に対して抱いていた感情は、後年漸く常陸国介の任を得た時に孝標が娘に語った「京とても、たのもしう迎へとりてむと思ふ類・親族もなし」という言葉に反映されているように思われるからである。すなわち、これらの役職に就いていた親族は京にいたはずであり、親族ならば娘達を「たのもしう迎へとるべき」であり、自分の任官についても「同じ心に思ふべき」であろうと思われるからである。

5

贈問の詞と歌とが以上のようなものであったとすると、孝標女の返歌は「暁を待つ」のみならず「なるとも聞かぬ」の主体もまた相手と理解して、次のような内容のものと見るのが自然のように思える。

暁などをどうしてあなたはお待ちになったのでしょう。思うことがなるともお聞きにならない鐘の音なのですから。

父の任官はどうせ望み薄だろうと思っていらしたのでしたら、暁を待つこともないでしょうに、と相手をなじりながらも、この返歌は、儀礼的であったにせよ任官の成否を問うて来た相手への回答も果たしていることになるわけである。

また、このような内容であるとすると、この歌は恋の返歌の類型を踏まえたものである可能性がでてくる。たとえば『篁物語』に、

うちとけぬものゆゑ夢を見て覚めてあかぬもの思ふころにもあるかな

うちとける機会がないものだから、あなたを夢に見ては目覚め、ものたりない思いをしています。

という男に対する女の返歌に、

いを寝ずは夢にも見えじを逢ふことの嘆く嘆くもあかしはてしを

寝なければ夢にも現れないでしょうに。わたしは、あなたに逢えないのを嘆いて、夜を明かしたものを。

と、自分は一睡もできないで夜を明かしたのに、あなたは寝ていらしたのですね、となじるものがある。このように、相手の自分を思う気持ちが自分の相手を思う気持ちより薄いとなじりつつ媚態を示すのは、恋の掛け合いでは一類型をなしているようだが、孝標女のこの返歌は、状況は異なるものの「同じ心に思ふべき人」に対して、この類型を踏まえているのではないかと思われるのである。そしてそれはおそらく、贈られてきた歌の「秋のもも夜の心地せしかな」の語句から触発されたものと思われる。「秋の百夜」という語句は萬葉集の相聞歌（4・五四六および五四八、この二首は古今六帖に

も採られている）に見られ、同じく孝標女の作かと言われる『浜松中納言物語』（巻三）にも、

一声にあかずと聞きし短か夜も秋のもも夜の心地こそすれ

という男の後朝の歌の中に見られる語句だからである。和歌においてはこの語句の用例は極めて少なく、右の他には、更に時代が降る『風雅和歌集』（巻6・五九四、前参議家親）に一例見られるだけのようであるが、その詞書には「伏見院、万葉のことばにて人々に歌よませさせ給ひける時、秋のももよといふ事を」とある。おそらく孝標女の時代においてもすでに、「万葉のことば」と意識されていたものと思われるが、孝標女はこの語句をその使い方まで萬葉集（あるいは古今六帖）を踏襲したものと思われる。

したがって、この孝標女の返歌は「自嘲にも似たあきらめの響き」ではなく（したがって、父孝標の立場も失われるようなものでもなく）、むしろ作者の才知と勝ち気な性格を読み取るべきではなかろうか（この司召の段のすぐ後に見える「奥山の」の返歌、また「深き夜に」の返歌にも同様の作者の性格が窺えるように思える）。岩波文庫本（西下経一氏校注）に次のような解説がある。

ここで作者の素質を考えよう。もし作者が現実と妥協したり、あきらめたりして、少しずつの改善に努力する型の女性ならば問題はないが、日記から見る作者は、個性が強くて妥協などできないで、現実で得られないものを、はるかかなたに夢みたのであろう。かてて加えて、彼女の心を傷つけ悲しませたもろもろの出来事は、現実をいとわしいものにし、現実に目をそむけさせ、それは自然に、現実のかなたに希望をつながせるのである。

この文章の筆者である西下氏（岩波文庫本・文学大系本）は、この「暁をなにに待ちけむ」の歌には特に訳は付けられていないが、「さりとも」の理解の仕方を考えあわすと、あるいは筆者と同様の理解をされていたのかもしれない。

ただ、次の例を考えあわすと、相手をなじる内容は父の代弁かもしれない。

朝倉や今は雲居に聞くものをなほ木のまろが名のりをやする

この歌は、継母であった人が、新しい夫ある身でありながら、父の旧官名にちなむ「上総大輔」の名で出仕していたのに対して、「今は私と遠く離れて宮中にお仕えする身の上と聞いていますが、それでもまだ私に縁のある名を用いておられるのですか」（集成）と、父に代わって詠んだものである。

6

返歌の結句「鐘の音ゆゑ」を前節で「鐘の音なのですから」と訳

したのは、次のような理由からである。

この「鐘の音ゆゑ」の「ゆゑ」のように、接続助詞あるいは接尾辞的に用いられているユヱ（ニ）は、漢文訓読文や片仮名混じり文などを除き、仮名文（和歌・和文）に限っても平安時代には約百例ほど拾えたが[2]、そのすべてが順態原因あるいは順態理由を示すものである。和歌の中の「修飾語句＋体言＋ユヱ（ニ）」の形のものに逆接性が感じられる例がいくつかあるが、それはユヱ（ニ）の語としての意味ではなく、一首全体の意味から生じる余情にすぎないものと考えられる[3]。たとえば、次のような例がそうである[4]。

①招くとて立ちも止まらぬ秋ゆゑにあはれ片寄る花薄かな
（拾遺集・二一一三）

②深くしも頼まざるらむ君ゆゑに雪踏み分けて夜な夜なぞいく
（詞花集・三一八）

例①と似た構文の歌に、

惜しめども散りも止まらぬ花ゆゑに春は山辺をすみかにぞする
（後拾遺集・一三二）

があるが、この「ゆゑに」は順接に理解するのが自然であろう。この「ゆゑに」と例①の「ゆゑに」とを区別する必要はないと考える。確かに例①の場合は原因として示されている「招くとて立ちも止まらぬ秋」から一般に予想される結果に沿わない事態が示されているので、逆接性が感じられることになるが、それは表現の背後にある一般的因果関係の意識に照らして生じるものであって、和歌の表現自体は「招くとて立ちも止まらぬ秋ゆゑに（ノタメニ）片寄る花薄」という因果関係をそのまま歌ったものと見るべきではあるまいか。例②も同様であり、「必ずしも私を深くは頼りにしていないであろうが、そのあなたにひかれて…」（新古典文学大系本訳）というように、ユヱを契機的原因を示すものと解して不都合はない。

たしかに、問題とする「鐘の音ゆゑ」の場合も、右と同じように考えることもできる。全集本の「…のため、…によっての意」としつつ、「逆接的な余韻を含んでいる」として「思うことがなるとも聞かない鐘の音だというのに」と訳しているものや、松尾聡氏の『校註更級日記』（笠間書院）の「『鐘のおとのために』の意で、自然『鐘の音であるのに』の意となる」と説明しているのは、この考え方である。旺文社文庫本の「鐘の音のために」とのみ訳しているのもまた、余情は余情として歌語の訳としては表現しなかったものと思われ、考え方は同じだと思われる。ただ、例①②のようなユヱと「暁をなにに待ちけむ」の歌のユヱとは、その用いられ方が異なっているような感じがある。大系本に「この『ゆゑ』は『ものゆゑ』と同じ意か。普通には『ために』となる」とあるのは、そのあたりの違いに触れたものかと思われる。たしかに、この「鐘の音ゆ

ゑ」の「ゆゑ」は目標・目的のタメニで理解した方が分かりやすいようである。しかし、「ゆゑ」とあることは動かせない。

③はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちつる　（源氏・葵）

の例の「ゆゑ」も同様である。「はかないことであることよ。人のかざしている葵（他の女と同車している人）ゆゑに、私は神のゆるしの葵（逢ふ日）を待ったのであった」（古典文学大系本訳）と通釈されているが、この「ゆゑ」もタメニ（目標・目的）で理解できそうである。しかし、これは、葵の存在を原因として今日を待つ行為が行われたという因果関係の上に、その葵が人のかざすものとなり、今日を待つ行為がはかないものとなったという結果の事態が重層的に表現された、和歌特有の表現と考えるべきものではないかと思う。このような表現については更に詳しく考えたいと思っているが、この考え方が正しければ、「ゆゑ」そのものはやはり順態原因を示すものということになる。

ともあれ、以上のように考えて、「鐘の音ゆゑ」もまた順態原因を示すものであり、余情として逆接性が感じられる例と処理して良いようにも思えるのであるが、躊躇するのは、この歌の場合のユヱは歌末にあり、上句には返らずに言いさしたものである可能性があるからである。もしそうなら、右に挙げた例はすべて、この「鐘の音ゆゑ」の「ゆゑ」を的確に説明する材料とはならないであろう。仮に「鐘の音ゆゑ」で言いさしたと見た場合、

暁をどうしてあなたはお待ちになったのでしょう。思うことがなるともお聞きにならない鐘の音なのですから（その必要はないはずでしょうに）。

のように、「…だから、…のはずだ」という言い方の後半を略したものと理解することができる。むしろこの方が前節までに述べた文脈からも自然のように感じられるのである。この場合「ゆゑ」は理由を示すものとなる。ユヱ（ニ）が理由を示す例には次のようなものがある。

④はなはだも降らぬ雨ゆゑにはたつみいたくな行きそ人の知るべく　（萬葉集・一三七〇）

たくさんも零らない雨なんだから庭の流れ水もひどくは行くな。人が知るほどに。（あんまり度々も逢ってはゐないのだから、ひどく素振りに出して人に知られるやうな事はしないでほしい。）　［澤瀉注釈］

⑤ゆく川の瀬ごとに踏まむ跡ゆゑに頼むしるしをいづれとか見む　（後撰集・六九六）

流れる水の浅瀬のあらゆる所を千鳥が踏んでつける足跡でありますから、どれが「頼むしるし」なのかと思って見ること

でしょうよ。―あなたはあちらこちらの女のもとに筆跡を残していらっしゃいますので、どれが私との未来を期待している証拠かしらと思って見ることでしょうよ。

［新古典文学大系訳］

⑥はかなくて絶えなむ蜘蛛の糸ゆゑに何にか多くかかむとぞ思ふ

（後撰集・一一三九）

あなたと私は今にも切れてしまう蜘蛛の糸のような、はかない関係にありますゆえに、蜘蛛の巣がきならぬたくさんの手紙を、どうして書こうと思いましょうか。

［新古典文学大系訳］

ただ、これらの例は受け部に命令や意志が含まれる例であり、推量を含む「暁をなにに待ちけむ」の歌の場合とは異なる。推量が受け部に含まれる場合は、

⑦難波江の蘆のかりねの一夜ゆゑ身をつくしてや恋ひわたるべき

（千載集・八〇七）

⑧ひさかたのあめにしほるる君ゆゑに月日も知らず恋ひわたるら む

（新古今集・八四九）

のように原因を示す場合も見られるのであるが、ユヱで示されるものが推量の根拠となっているものは理由を示すと考えられる。たとえば、

⑨ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしから まし

（紫式部日記）

の歌を「そのままではすますまいと熱心に戸をたたく水鶏―あなたのことゆゑ、戸を開けでもしたら、どんなに悔しいことになったでしょう」（岩波文庫本訳）と理解した場合がこの例にいる。

「暁をなにに待ちけむ」の歌が結句から上句に返る場合でも、前節の始めに示したような訳で、この例⑨と同様に「ゆゑ」を理由を示すものと見ることができるのである。

言いさしのかたちにせよ、上句に返るにせよ、この「ゆゑ」が理由を示すものであれば、一首の意味には逆接性はないことになる。

注

① 中西宇一氏「『べし』の推定性―様相と推定と意志―」（『萬葉』七一号 一九七一・七）・「『べし』の意味」（『月刊文法』一の四 一九七六・一二）

② 調査したものは、八代勅撰和歌集・竹取物語・伊勢物語・大和物語・篁物語・平中物語・宇津保物語・落窪物語・源氏物語・狭衣物語・堤中納言物語・浜松中納言物語・夜の寝覚・枕草子・かげろふ日記・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・いほぬし、また若干の私家集と歌合集。

③ 上代の例についても同様であることは、拙稿「人妻ゆゑに―逆的に訳されるユヱについて―」（『萬葉』一三七号 一九八〇・一一）で述べた。

④ 例①の「秋ゆゑに」は『好忠集』では「ものゆへに」とあり、例②は阿仏尼筆本の「きみゆへに」の「きみ」の上に「もの」と書いてあるよ

しである（岩波文庫本註記）。このような改変の事実は、例①②のユヱニに逆接性が感じ取れることを示すものと言える。しかし、「修飾語句＋体言＋ユヱ（ニ）」の場合に感じ取れる逆接性と接続助詞モノユヱ（ニ）の逆接用法とは、表現としては区別されなければならないと考える。